
闇に包まれた谷で咲く一輪の花

SAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇に包まれた谷で咲く一輪の花

【Nコード】

N3904P

【作者名】

SAO

【あらすじ】

篠ノ之 東によって命を救われた、孤児の少年 小熊純一。彼は世界に2人しかいない男でISを使うことができる人物である。そして、純一はIS学園と入学するのだが……

TURN 1 2人の男子入学生（前書き）

初めまして、SAOです。

この小説は感想懇願小説となっております。

どんどん感想を頂けると嬉しいです。

TURN 1

2人の男子入学生

千冬side

私は戸惑っていた。わが弟である一夏が、本来女性しか使うことができないISを起動させることができたからである。そして、一夏は明日、初の男子入学生としてこの学校に入学してくる。

そのとき、いきなり私の携帯電話が鳴った。

その電話に出ると、電話の相手は私の親友であった。

「はろー、ちーちゃん！」

「珍しいな、お前から私に連絡を取るなんて」

「そんなことないよ、私はちーちゃんのことを思うと夜も眠れないよ」

「冗談を言っていないで本題に入れ。大事な要件があったからこそ私に連絡してきたんだろ？」

「釣れないな、ちーちゃんは。ヒンバスもびっくりなぐらい釣れないよ。」

まあいいや、本題を言うと、私の知り合いの男の子が明日、ちーちゃんに務めてる学校に入学するから4649!」

なぜ、どっかの古い暴走族みたいになってるのかはおいておこう。

というか、こいつに突っ込んどるとキリがない。

「お前の知り合い？あの、お前にそんな親しい知り合いなんているのか？」

そのうえ男でありながらISを動かせるやつが？」

「4年くらい前だったかな？」

私が中国に身を隠してた時に、一人の孤児の男の子を見つけたんだよ。

普段なら、なんとも思わないんだけどね、どうしてかその子だけは放っておけなくて、拾って一緒に暮らしてたんだよ。」

基本、束は私を含めて数人以外の人間には興味がない。

本人曰く「人間の区別がつかないね。わかるのは箒ちゃんとかーちやんといつくんくらいだね。あと、まあ両親かねえ。

うふふ、興味ないからね、他の人間なんて」とのこと。

そんな束が他人に興味を持ったというのだから、ものすごいことである。

「でね、一緒に暮らして時に、なんかの弾みでその子がISに触れたら、見事に起動しちゃってね・・・。

さすがにあの時はこの天才、束さんでも驚いたよ。

で、それから一緒に暮らしてたんだけど、ちょうどいいからIS学園に通ってもらおうと思って」

そう、先ほど一夏が初めての男子入学生と言ったが、正しくは一夏達2人が初めての男子入学生なのだ。

まさか、もう一人の子が束の知り合い、それも話を聞く限りとても仲のいい子だとは思ってもみなかったが。

確か名前は、小熊準一といったか？

「で、準君はそのあと、ずううううと私の指導の下でISについて学んだらISの適性試験でSをとっちゃったんだよね。

ほんと、準君はかわいいし、かつこいいし。

まるで、フォレットみたい」

褒められているのか微妙な評価だが、束のことだから褒めているのだろう。

それはいいとして、驚きだったのは、その準一という子が入学試験の適性試験でSを取ったのだ。

Sを出したやつなんておそらく指で数えられるほどしかないだろう。

そのうえ、男子でなんて前人未到だ。

「ということで、明日から準君のことよろしくね。

じゃあね、ちーちゃん！」

そういうと、一方的に電話を切られた。

それにしても、男子生徒2人が学園、いや、この世界にどんな変化

をもたらすのだろうか？

ISとは正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツのことである。

コアを製造できるのは開発者である篠ノ之束のみであるが、ある時期を最後に束はコアの製造をやめたため、ISの絶対数が467機となり、現在第1～4世代機が存在している。

ISは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されている。その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い『究極の機動兵器』。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや『絶対防御』などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。また、ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。さらに、ハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ、実行へと移せる。

目が覚めると、いつもどおり見慣れた天井が目に入った。

時計を見ると午前6時半、入学式は9時からなのでちょうどいい時刻である。

ベッドから出て、顔を洗い、朝ご飯を作っているとケータイが鳴った。

「おはよー、準君」

「おはようございます、束さん」

電話の相手は予想通り束さんだった。

「ちゃんと一人で起きられたんだね、偉い偉い。」

偉さの度合いでいうとHR3くらいだね」

相変わらず、東さんのたえはよくわからなかった。

。 とうか、HRは高ければ偉いっていうものではないと思うが・・・

「ISのほうは不具合ない？」

「大丈夫です・・・っていうか使ってないので分かりませんが」

「不具合があつたらすぐに教えてね。」

準君のためなら飛んでいくから」

この人は実際に飛んでくるから怖いのである。

本人曰く、昔ミサイル型のもので飛んで行ったら撃墜されそうになったとか・・・。

「学園の私の知り合いにも連絡しておいたから、何か分からないことがあつたら聞いてね。」

それじゃ、ばいばいきーん」

束さんはどこそのバイキンマンのように最後を締めくくった。

今は教室での自己紹介の最中だ。

予想通り、入学式の最中は好奇の視線が集中しており……なん
というかもすごく疲れた。

そして、自己紹介は名前順に行っているので俺の番はもう回ってき
た。

「小熊純一です。いろいろとわからないことやなれないことがある
と思うので、教えていただけたら嬉しいです」

自己紹介を終えると周りの女子から黄色い歓声が上がった。

なんというか恥ずかしい。

「それでは、次、織斑君よろしくお願いします」

「織斑一夏です、よろしくお願いします」

もう一人の男子生徒は簡潔に自己紹介を終えた。

休み時間になると俺は織斑一夏にしゃべりかけてみた。

「俺は小熊純一、よろしくな」

「俺は織斑一夏だ。男子生徒は2人しかいないんだし、助け合っ
ていこうぜ」

「一夏って呼んでいいか？」

「いいぜ。俺も準一って呼ぶな」

「ああ」

「準一はさっきのIS基礎理論の授業分かったか？」

「ああ、思ったより簡単だったな」

俺は4年近く束さんにISについて教えてもらっていたのだ。

正直、この学校の教師よりも知っている自身がある。

「まじかよー。俺は全然意味不明だったんだが」

「多分、俺たちは同部屋だろ？」

だから、あとで教えてやるよ」

「マジか！助かる」

「それにしても……この女子の好奇の視線はどうにかならないものかね」

教室のクラスメートだけではなく、他クラスの女子、そして廊下にいる2、3年の先輩たちからの視線が俺たちに集まっている。

しかし、女子だけの空間になじんでしまっているのか、なかなか俺たちに話しかけるといことはしない。

それはクラスの女子も同じで、「あなた話しかけなさいよ」という空気と、「ちょっとまさか抜け駆けするつもりじゃないでしょうね」的な緊張感が満ちている。

「ちょっといいか？」

突然話しかけられた。正しくは一夏が。

「……第？」

どうやら一夏の知り合いのようだ。

「廊下でいいか？」

教室ではしゃべりにくいことなのか篝と呼ばれた少女と一夏は教室の外に出て行った。

すると、どうなるか？

簡単なことである、今まで2人にあたっていた好奇の視線が俺1人に集まる。

早く一夏帰ってこないかな・・・。

T U R N 1

2人の男子入学生（後書き）

次回、あの代表候補生が登場する？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3904p/>

闇に包まれた谷で咲く一輪の花

2010年12月9日04時43分発行